

夏目漱石先生の追憶

寺田寅彦

青空文庫

くまもと
熊本

第五高等学校在学中第二学年の学年試験の終わったころの事である。同県学生のうちで試験を「しくじつたらしい」二三人のためにそれぞれの受け持ちの先生がたの私宅を歴訪していわゆる「点をもらう」ための運動委員が選ばれた時に、自分も幸か不幸かその一員にされてしまった。その時に夏目先生の英語をしくじつたというのが自分の親類づきの男で、それが家が貧しくて人から学資の支給を受けていたので、もしや落第するとそれきりその支給を断たれる恐れがあつたのである。

初めて尋ねた先生の家は白川しろかわの河畔で、藤崎神社ふじさきじんじやの近くの閑静な町であつた。

「点をもらいに」来る生徒には断然玄関払いを食わせる先生もあつたが、夏目先生は平気で快く会ってくれた。そうして委細の泣き言の陳述を黙って聞いてくれたが、もちろん点をくれるともくれないとも言われるはずはなかった。とにかくこの重大な委員の使命を果たしたあとでの雑談の末に、自分は「俳句とはいったいどんなものですか」という世にも愚劣なる質問を持ち出した。それは、かねてから先生が俳人として有名なことを承知していたのと、そのころ自分で俳句に対する興味がだいぶ発酵しかけていたからである。その時に先生の答えたことの要領が今でもはつきりと印象に残っている。「俳句はレトリック

の煎じ詰めたものである。「扇のかなめのような集注点を指摘し描写して、それから放散する連想の世界を暗示するものである。」「花が散って雪のようだといったような常套な描写を月並みという。」「秋風や白木の弓につる張らんといったような句は佳い句である。」「いくらやつても俳句のできない性質の人があるし、始めからうまい人もある。」「こんな話を聞かされて、急に自分も俳句がやってみたくなった。そうして、その夏休みに国へ帰ってから手当たり次第の材料をつかまえて二三十句ばかりを作った。夏休みが終わって九月に熊本へ着くなり何より先にそれを持って先生を訪問して見てもらった。その次に行つた時に返してもらつた句稿には、短評や類句を書き入れたり、添削したりして、その中の二三の句の頭に○や●が付いていた。それからが病みつきでずいぶん熱心に句作をし、一週に二三度も先生の家へ通つたものである。そのころはもう白川畔の家は引き払つて内坪井に移つていた。立田山麓の自分の下宿からはずいぶん遠かつたのを、まるで恋人にでも会いに行くような心持ちで通つたものである。東向きの、屋根のない門をはいつて突き当たりの玄関の靴脱ぎ石は、横降りの雨にぬれるような状態であつたような気がする。雨の日など泥まみれの足を手ぬぐいでごしごしふいて上がるのはいいが絹の座ぶとんにすわられるのに気が引けた記憶がある。玄関の左に六畳ぐらいの座敷があり、

その西隣が八畳ぐらいいで、この二室が共通の縁側を越えて南側の庭に面していた。庭はほとんど何も植わっていない平庭で、前面の建仁寺垣けんんにんじがきの向こう側には畑地があった。垣からんだ朝顔のつるが冬になつてもやっぱりがらになつて残つていたようである。この六畳が普通の応接間で、八畳が居間兼書斎であつたらしい。「朝顔や手ぬぐい掛けにはい上る」という先生の句があつたと思う。その手ぬぐい掛けが六畳の縁側にかかつていた。

先生はいつも黒い羽織を着て端然として正座していたように思う。結婚してまもなくつた若い奥さんは黒ちりめんの紋付きを着て玄関に出て来られたこともあつた。田舎者の自分の目には先生の家庭がずいぶん端正で典雅なもののように思われた。いつでも上等の生菓子を出された。美しく水々とした紅白の葛餅くずもちのようなものを、先生が好きだと見えてよく呼ばれたものである。自分の持つて行く句稿を、後には先生自身の句稿といつしよにして正岡子規まぎおかしきの所へ送り、子規がそれに朱を加えて返してくれた。そうして、そのうちからの若干句が「日本」新聞第一ページ最下段左すみの俳句欄に載せられた。自分も先生のまねをしてその新聞を切り抜いては紙袋の中にたくわえるのを楽しみにしていた。自分の書いたものがはじめて活字になつて現われたのがうれしかったのである。当時自分のほかに先生から俳句の教えを受けていた人々の中には厨川千江くりやがわせんこう、平川草江ひらかわそうこう、蒲生紫

川（後の原医学博士）等の諸氏があつた。その連中で運座というものを始め、はじめは先生の家でやっていたのが、後には他の家を借りてやったこともあつた。時には先生と二人対座で十分十句などを試みたこともある。そういうとき、いかにも先生らしい凡想を飛び抜けた奇抜な句を連発して、そうして自分でもおかしがつてくすくす笑われたこともあつた。

先生のお宅へ書生に置いてもらえないかという相談を持ち出したことがある。裏の物置きなら明いているから来てみると言つて案内されたその室は、第一、畳がはいであつてごみだらけでほんとうの物置きになつていたので、すっかりしよげてしまつて退却した。しかし、あの時、いいからはいりますと言つたら、畳も敷いてきれいにしてくれたであつたろうが、当時の自分にはその勇氣がなかつたのであつた。

そのころの先生の親しかつた同僚教授がたの中には狩野亨吉、奥太一郎、山川信次郎らの諸氏がいたようである。「二百十日」に出て来る一人が奥氏であるというのが定評になつていようである。

学校ではオピウムイーターや、サイラス・マーナーを教わつた。松山^{まつやま}中学時代には非常に綿密な教え方で逐字的解釈をされたそうであるが、自分らの場合には、それとは反対

にむしろ達意を主とするやり方であった。先生がただすらすら音読して行つて、そうして「どうだ、わかつたか」といったふうであった。そうかと思うと、文中の一節に関して、いろいろのクオーテーションを黒板へ書くこともあった。試験の時に、かつて先生の引用したホーマーの詩句の数節を暗唱していたのをそっくり答案に書いて、大いに得意になつたこともあった。

教場へはいると、まずチョツキのかくしから、鎖も何もつかないニツケル側の時計を出してそつと机の片すみへのせてから講義をはじめた。何か少し込み入つた事について会心の説明をするときには、人さし指を伸ばして鼻柱の上へ少しはすかいに押しつける癖があった。学生の中に質問好きの男がいて根掘り葉掘りうるさく聞いていると、「そんなことは、君、書いた本人に聞いたつてわかりやしないよ」と言つて撃退するのであった。当時の先生は同窓の一部の人々にはたいそうこわい先生だったそうであるが、自分には、ちつともこわくない最も親しいなつかしい先生であつたのである。

科外講義としておもに文科の学生のために、朝七時から八時までオセロを講じていた。寒い時分であつたと思うが、二階の窓から見ていると黒のオーバーにくるまつた先生が正門から泳ぐような格好で急いではいつて来るのを「やあ、来た来た」と言つてはやし立て

るものもあつた。黒のオーバーのボタンをきちんとはめてなかなかハイカラでスマートな風采ふうさいであつた。しかし自宅にいて黒い羽織を着て寒そうに正座している先生はなんとなく水戸浪士みづとうしとでもいったようなクラシカルな感じのするところもあつた。

暑休に先生から郷里へ帰省中の自分によこされたはがきに、足を投げ出して仰向けに昼寝している人の姿を簡単な墨絵にかいて、それに俳句が一句書いてあつた。なんとかで「たぬきの昼寝かな」というのであつた。たぬきのような顔にぴんと先生のようなひげをはやしてあつた。このころからやはり昼寝の習慣があつたと見える。

高等学校を出て大学へはいる時に、先生の紹介をもらつて上根岸かみねぎしうぐいすよこちよう鵜横町に病床の正岡子規子をたずねた。その時、子規は、夏目先生の就職その他についていろいろ骨を折つて運動をしたというような話をして聞かせた。実際子規と先生とは互いに畏敬いけいし合つた最も親しい交友であつたと思われる。しかし、先生に聞くと、時には「いったい、子規という男はなんでも自分のほうがえらいと思つてゐる、生意気なやつだよ」などと言つて笑われることもあつた。そう言いながら、互いに許し合ひなつかしがり合つてゐる心持ちがよくわかるように思われるのであつた。

先生が洋行するので横濱よこはまへ見送りに行つた。船はロイド社のプロイセン号であつた。

船の出るとき同行の芳賀さんはがと藤代さんふじしろは帽子を振って見送りの人々に景気のいい挨拶あいさを送っているのに、先生だけは一人少しはなれた舷側げんそくにもたれて身動きもしないでじつと波止場はとばを見おろしていた。船が動き出すと同時に、奥さんが顔にハンケチを当てたのを見た。「秋風の一人を吹くや海の上」という句をはがきに書いて神戸こうべからよこされた。先生の留学中に自分は病氣になつて一年休学し、郷里の海岸で遊んでいたので、退屈まかせに長たらしい手紙をかいてはロンドンの先生に送った。そうして先生からのたよりの来るのを楽しみにしていた。病氣がよくなつて再び上京し、まもなく妻をなくして本郷五丁目に下宿していたときに先生が帰朝された。新橋駅しんばし（今の汐留しおどめ）へ迎いに行ったら、汽車からおりた先生がお嬢さんのあごに手をやって仰向かせて、じつと見つめていたが、やがて手をはなして不思議な微笑をされたことを思い出す。

帰朝当座の先生は矢来町やらいちようの奥さんの実家中根氏邸なかねに仮寓かぐうしていた。自分のたずねた時は大きな木箱に書物のいっぱいしまった荷が着いて、土屋君つちやという人がそれをあけて本を取り出していた。そのとき英国の美術館にある名画の写真をいろいろ見せられて、その中ですきなのを二三枚取れと言われたので、レイノルズの女の子の絵やムリリヨのマグダレナのマリアなどをもらった。先生の手かばんの中から白ばらの造花が一束出て来た。それ

はなんですかと聞いたら、人からもらったんだと言われた。たしかその時にすしのごちそうになった。自分はちつとも気がつかなかったが、あとで聞いたところによると、先生が海苔巻のりまきにはしをつけると自分も海苔巻を食う。先生が卵を食うと自分も卵を取り上げる。

先生が海老えびを残したら、自分も海老を残したのだそうである。先生の死後に出て来たノートの中に「Tのすしの食い方」と覚え書きのしてあったのは、この時のことらしい。

千駄木せんだぎへ居を定められてからは、また昔のように三日にあげず遊びに行った。そのころ

はやはりまだ英文学の先生で俳人であっただけの先生の玄関はそれほどにぎやかでなかったが、それでもずいぶん迷惑なことであつたに相違ない。きようは忙しいから帰れと言われても、なんとか、かとか勝手な事を言つては横着にも居すわつて、先生の仕事をしているそばでスチュディオの絵を見たりしていた。当時先生はターナーの絵が好きで、よくこの画家についていろいろの話をされた。いつだったか、先生がどこから少しばかりの原稿料をもらった時に、さつそくそれで水彩絵の具一組とスケッチ帳と象牙ぞうげのブックナイフを買つて来たのを見せられてたいそううれしそうに見えた。その絵の具で絵はがきをかいて親しい人たちに送ったりしていた。「猫」ねこ以後には橋口五葉氏はしぐちごようや大塚楠緒子おおくまのほこ女史などとも絵はがきの交換があつたようである。象牙のブックナイフはその後先端が少し欠けた

のを、自分が小刀で削って形を直してあげたこともあった。時代をつけると言つてしよつちゆう頼ほおや鼻へこすりつけるので脂あぶらが滲透しんとうして鼈甲色べっこういろになつていた。書齋の壁にはなんとかいう黄檗おうばくの坊さんの書の半折はんせつが掛けてあり、天狗てんぐの羽団扇はうちわのようなものが座右に置いてあつた事もあつた。セピアのインキで細かく書いたノートがいつも机上にあつた。鈴木三重吉君自画の横顔の影法師が壁にはつてあつたこともある。だれかからもらったキユラソーのびんの形と色を愛しながら、これは杉すぎの葉のにおいをつけた酒だと言つて飲まされたことを思い出すのである。草色の羊羹ようかんが好きであり、レストーランへいっしょに行くと、青豆のスープはあるかと聞くのが常であつた。

「吾輩わがはいは猫である」で先生は一足飛びに有名になつてしまった。ホトトギス関係の人々の文章会が時々先生の宅うちで開かれるようになった。先生の「猫」のつづきを朗読するのはいつも高浜たかはまさんであつたが、先生は時々はなはだきまりの悪そうな顔をして、かたくなつて朗読を聞いていたこともあつたようである。

自分が学校で古いフィロソフィカル・マガジンを見ていたらレヴェレンド・ハウトンという人の「首つりの力学」を論じた珍しい論文が見つかったので先生に報告したら、それはおもしろいから見せろというので学校から借りて来て用立てた。それが「猫ねこ」の寒月かんげつ

君の講演になつて現われている。高等学校時代に数学の得意であつた先生は、こういうものを讀んでもちゃんと理解するだけの素養をもつていたのである。文学者には異例であらうと思う。

高浜、坂本、寒川諸氏と先生と自分とで神田連雀町の鶏肉屋へ昼飯を食ひに行つた時、須田町へんを歩きながら寒川氏が話した、ある変わり者の新聞記者の身投げの場面がやはり「猫」の一節に寒月君の行跡の一つとして現われているのである。

上野の音楽学校で毎月開かれる明治音楽会の演奏会へ時々先生といつしよに出かけた。ある時の曲目中にかえるの鳴き声やらシャンペンを抜く音の交じつた表題樂的なものがあった。それがよほどおかしかつたと見えて、帰り道に精養軒前をぶらぶら歩きながら、先生が、そのグウ／＼／＼／＼というかえるの声のまねをしては実に腹の奥からおかしそうに笑うのであつた。そのころの先生にはまだ非常に若々しい書生っぽいところが多分にあつたような気がする。

自分の白いネルの襟巻がよごれてねずみ色になつてゐるのを、きたないからと言つて女中にせんとくさせられたこともあつたが、とにかく先生は江戸ツ子らしいなかなかのおしゃれで、服装にもいろいろの好みがあり、外出のときなどはずいぶんきちんとしていた

ものである。「君、服を新調したから一つ見てくれ」と言われるようなこともあった。服装については自分は先生からは落第点をもらっていた。綿ネルの下着が袖口から二寸もはみ出しているのが、いつも先生から笑われる種であった。それから、自分が生来のがまま者でたとえば引越しの時などでもちつとも手伝わなかつたりするので、この点でもすっかり罰点をつけられていた。それから丁は国のみやげに鰹節かつおぶしをたった一本持つて来たと言つて笑われたこともある。しかし子供のような心で門下に集まる若い者には、あらゆる弱点や罪過に対して常に慈父の寛容をもつて臨まれた。そのかわり社交的技巧の底にかくれた敵意や打算に対してかなりに敏感であつたことは先生の作品を見てもわかるのである。

「虞美人草ぐびじんそう」を書いていたところに、自分の研究をしている実験室を見せろと言われるので、一日学校へ案内して地下室の実験装置を見せて詳しい説明をした。そのころはちょうど弾丸の飛行している前後の気波をシュリーレン写真にとることをやっていた。「これを小説の中へ書くがいいか」と言われるので、それは少し困りますと言ったら、それなら何か他の実験の話をしろというので、偶然そのころ読んでいたニコルスという学者の「光圧の測定」に関する実験の話をした。それをたった一ぺん聞いただけで、すっかり要領をのみ込

んで書いたのが「野々宮さん」の實驗室の光景である。聞いただけで見たことのない実験
がかなりリアルに描かれているのである。これも日本の文学者には珍しいと思う。

これに限らず一般科学に対しては深い興味をもっていて、特に科学の方法論的方面の話
をするのを喜ばれた。文学の科学的研究方法といったような大きなテーマが先生の頭の中
に絶えず動いていたことは、先生の論文や、ノートの中からも想像されるであろうと思う。
しかし晩年には創作のほうに忙しくて、こうした研究の暇がなかったように見える。

西片町にしばらくいて、それから早稲田南町へ移られても自分は相変わらず頻繁
に先生を訪問した。木曜日が面会日ときまつてからも、何かと理屈をつけては他の週日に
もおしかけて行ってお邪魔をした。

自分の洋行の留守中に先生は修善寺であの大患にかかれ、死生の間を彷徨された
のであったが、そのときに小宮君からよこしてくれた先生の宿の絵はがきをゲツチンゲン
の下宿で受け取ったのであった。帰朝して後に久々で会った先生はなんだか昔の先生とは
少しちがった先生のように自分には思われた。つまりなんとなく年を取られたといふので
もあろう。かえるの声のまねをするような先生はもういなかった。昔かいた水彩画の延長
と思われる一流の南画のようなものをかいて楽しんでおられた。無遠慮な批評を試みると

口を四角にあいて非常に苦い顔にがをされたが、それでも、その批評を受けいれてさらに手を入れられることもあった。先生は一面非常に強情なようでもあったが、また一面には実に素直に人の言う事を受けいれる好々爺こうこうやらしいところもあった。それをいいことにして思い上がった失礼な批評などをしたのは済まなかったような気がする。いつかおおぜいで先生を引っぱって浅草あさくさへ行つてルナパークのメリーゴーラウンドに乗せたこともあったが、いかにも迷惑そうではあったが若い者の言うなりになって木馬にのつかつてぐるぐる回っていた。そのころよく赤城下あかぎしたの骨董店こつとうてんをひやかして、「三円の柳里恭りゅうりきよう」などを物色して来ては自分を誘つてもう一ぺん見に行かれたりした。京橋きょうばしぎわの読売新聞社で第一回のヒューザン会展覽会が開かれたとき、自分が一つかなり気に入った絵があつて、それを奮発して買おうかと思うという話をしたら、「よし、おれが見てやる」と言つて同行され、「なるほど。これはいいから買いたまえ」といわれたこともあった。

晩年には書のほうも熱心であつた。滝田樗陰たきたちよん君が木曜面会日の朝からおしかけて、居催促で何枚でも書かせるのを、負けずにいくらでも書いたそうである。自分はいつでも書いてもらえるような気がしてついつい絵も書も一枚ももらわないうでいたら、いつか先生からわざわざ手紙を添えて絹本に漢詩を書いたのを贈られた。千駄木せんだぎ時代の絵はがきのほか

にはこれが唯一の形見になったのであったが、先生死後に絵の掛け物を一幅御遺族から頂^ちようだい戴^{ようだい}した。

謡曲を宝生新^{ほうしょうしん}氏に教わっていた。いつか謡^{うた}つて聞かされたときに、先生の謡は巻き

舌だと言ったら、ひどいことを言うやつだと言つていつまでもその事を覚えておられた。

いつか早稲田^{わせだ}の応接間で先生と話をしていたら廊下のほうから粗末な服装をした変な男が酔っぱらったふうでうそうそはいって来て先生の前へすわりこんだと思うと、いきなり大声で何かしら失礼な口調でのしり始めた。あとで聞くとそれはM君が連れて来た有名な過去の文士のOというのであった。連れて来たM君はこの意外の光景にすっかり面食らつて立ち往生をしたそうであるが、その時先生のこの酔漢に対する応答の態度がおもしろかった。相手の酔っぱらいの巻舌舌に対して、どっちも負けずに同じような態度と口調で、小気味よくやりとりをしていた。負けぬ氣の生^{きつすい}粋の江戸ツ子としての先生を、この時目前に見ることができたような氣がするのであった。

先生最後の大患のときは、自分もちょうど同じような病氣にかかつて弱っていた。江戸^{えど}川畔の花屋でベコニアの鉢^{はち}を求めてお見舞いに行ったときは、もう面会を許されなかった。奥さんがその花を持って病室へ行ったら一言「きれいだな」と言われたそうである。勝手

のほうの炉のそばでM医師と話をしていたら急に病室のほうで苦しそうなうなり声が聞こえて、その時にまた多量の出血があつたようであつた。

臨終には間に合わず、わざわざ飛んで来てくれたK君の最後のしらせに、人力にゆられて早稲田まで行つた。その途中で、車の前面の幌ほろにはまったセルロイドの窓越しに見る街路の灯ひが、妙にぼやけた星形に見え、それが不思議に物狂わしくおどり狂うように思われたのであつた。

先生からはいろいろのものを教えられた。俳句の技巧を教わつたというだけではなく、自然の美しさを自分自身の目で発見することを教わつた。同じようにまた、人間の心の中の真なるものと偽なるものとを見分け、そうして真なるものを愛し偽なるものを憎むべき事を教えられた。

しかし自分の中にいる極端なエゴイストに言わせれば、自分にとっては先生が俳句がうまかろうが、まずかろうが、英文学に通じていようがいまいが、そんな事はどうでもよかった。いわんや先生が大文豪になろうがなるまいが、そんなことは問題にも何もならなかった。むしろ先生がいつまでも名もないただの学校の先生であつてくれたほうがよかったのではないかというような気がするくらいである。先生が大家にならなかつたら少なくとも

つと長生きをされたであろうという気がするのである。

いろいろな不幸のために心が重くなつたときに、先生に会って話をしていると心の重荷がいつのまにか軽くなつていた。不平や煩悶はんもんのために心の暗くなつた時に先生と相對している、そういう心の黒雲がきれいに吹き払われ、新しい気分で自分の仕事に全力を注ぐことができた。先生というものの存在そのものが心の糧かてとなり医薬となるのであつた。こういう不思議な影響は先生の中のどこから流れ出すのであつたか、それを分析しうるほどに先生を客観する事は問題であり、またしようとは思わない。

花下の細道をたどつて先生の門下に集まつた多くの若い人々の心はおそらく皆自分と同じようなものであつたろうと思われる。それで自分のここに書いたこの取り止めもない追憶が、さもさも自分だけで先生を独占していたかのように読者に見えたとすれば、それはおそらく他の多くの門下生の各自の偽らぬ心持ちを代表するものとして了解しゆるしてもらわれるべきだと思う。そういう同門下の人たちと先生没後の今日、時おり何かの機会で顔を合わせるごとに感じる名状し難いなつかしさの奥には、千駄木せんだぎや早稲田わせだの先生の家における、昔の愉快的集会の記憶が背景となつて隠れているであらう。

記憶の悪い自分のこの追憶の記録には、おそらく時代の錯誤や、事実の思い違いがいろ

いろいろあるであろうと思う。ただ自分の主観の世界における先生のおもかげを、自分としてはできるだけ忠実に書いてみたつもりであるが、学者として、作家として、また人間としての先生の面影を紹介するものとしては、あまりにも零細な枝葉の断片に過ぎないものである。これについてはひたすらに読者ならびに同門下諸賢の寛容を祈る次第である。

（昭和七年十二月、俳句講座）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第三卷」岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年4月16日第20刷改版発行

1993（平成5）年2月5日第59刷発行

入力：（株）モモ

校正：かとうかおり

2003年2月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夏目漱石先生の追憶

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>